

IGS セミナーを終えて——リプライの試み——

栗田啓子（東京女子大学）

はじめに—お茶の水女子大学本館

2017年2月22日（水）に、IGSセミナーとして、私たちが2016年3月に刊行した『日本における女性と経済学：1910年代の黎明期から現代へ』（北海道大学出版会、以下本文では本書と表記）の合評会が開催された。圧倒的に男性比率が高い経済学史学会を主な研究活動の場としている私たち編者3人にとって、参加者がほとんど女性のセミナーは新鮮な経験だった。3人のコメンテーターの問題提起を受けて、会場の議論は、松平友子の家事経済学の系譜を引く「生活者の経済学」という新たな経済学の可能性と女性が経済学に向かうことによる「社会の経済学化」のさらなる推進の功罪の二つの方向性に集中したように思われる。丁寧に本書を読んでくださったコメンテーターの方たち、活発に議論に参加された出席者の方たち、そして何よりも、このような忌憚のない議論の場を提供してくださったお茶の水女子大学ジェンダー研究所に、この場を借りて、お礼申し上げたい。

このセミナーでは、合評会での議論とは別に、嬉しいことが二つあった。ひとつは、8章を担当された伍賀借子氏による、リプライ後の論点提供である。伍賀氏は、7章を担当された竹中恵美子氏の理論的営みと女性労働運動の実践との関わりを、当事者として、振り返っただけでなく、その関わりが今も続いており、若い人たちを巻き込んで再生産されていることを報告された。竹中氏と伍賀氏を中心とした理論と実践の相互作用が女性と経済学の関わりを象徴する事象であることは本書の強調点の一つだっただけに、伍賀氏の「生の声」がセミナー参加者の関心をぐいぐいと引きつけてゆく様子に感動さえ覚えた。

もうひとつの嬉しさは、セミナーがお茶の水女子大学本館という歴史的建造物で開催されたことである。セミナーが始まる前に廊下を歩いてみると、つぎつぎと家政学に関連する実習室や実験室が現れ、家政学部の往時の雰囲気を感じ取ることができた。当時は高等師範学校女子部だったお茶の水女子大学において、1899年（明治32年）に日本で初めて家事専門の教員養成を目的として増設された技芸科は、1914年（大正3年）に家事科と改称され、女子高等師範学校家政学部の原点を形成した¹。その家事科において、1922年から松平友子が「家事経済」を教授したことは、本書で松野尾裕氏が明らかにしたとおりである²。想像の域を出ないものの、家事の実習室・実験室が並ぶ校舎で学ぶ経済学とリベラル・アーツ教育を標榜する学校で学ぶ経済学とでは、講義内容のちがいはもちろんのこと、学生の受け止め方も随分違ったのではないか、という思いがよぎった。

ここでは、この思いを出発点とし、家政系とリベラル・アーツ系の経済学教育の異同の検証を意識しながら、セミナーで十分対応できなかった2つの論点に絞って、改めてリプライを試みることにしたい。

1 「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会（1964）pp.630-631&p.660

2 栗田・松野尾・生垣（2016）p.89。「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会（1964）は、松平が1919年から教鞭を執ったとしているが（p.660）、松野尾氏が明らかにしたように、この年は松平が東京帝国大学で経済学を学び始めた年である。

1. 「生活への視点」と「社会への視点」

1-1. 生活者の視点

「はじめに」に書いたように、当日の主要な論点の一つは、「生活者の経済学」の可能性だった。それは、本書5章を担当された上村協子氏が、セミナー冒頭で、「生活への視点」から「生活者の視点」への移行の必要性を説かれ、天野正子氏（1938-2015）が提起した「家政学」から「現代生活学」への展開を評価されたことがきっかけだった。コメンテーターのお一人である足立眞理子氏も、家政学部が担った女性による経済学の意味のひとつに「生活者視点の経済循環」を挙げられた。経済学に対する女性の貢献が生活者という視点の確立にあるという、この認識の共有が本セミナーのひとつの成果であったことは間違いない。しかし、本書第3部で取りあげた「労働への視点」と重ね合わせてみると、竹中恵美子氏による「労働力商品化体制」が社会的生産と私的生産とを総合的に捉える概念であるのに対して、「生活者」概念自体まだ茫漠としており、この概念を出発点とした社会の把握もこれからの課題と言わざるを得ない段階である。

1-2. 社会の「経済学化」

「生活への視点」は、実は本書第2部のタイトルだったのだが、それとの対比で言えば、本書第1部は「社会への視点」というタイトルがふさわしかったかも知れない。セミナーにおける私の報告タイトルを「女性版『社会』の発見」としたのは、そのような考えに至ったからだった³。もう一人のコメンテーター、金野美奈子氏は本書第1部の意図を明瞭に読み取り、新渡戸稲造や森本厚吉が社会の発見を促す社会認識の学として経済学を位置づけたことを「社会の『経済学化』」の一環と位置づけられた⁴。それはその通りである。しかし、私のセミナー報告タイトルでも強調したように、「社会」は、そして、おそらく「生活」も、手つかずの自然のように客体として存在するものではなく、「発見」されるものだと私は考えている。そのためには、発見するための道具の内容あるいは質が問われなければならない。つまり、どのような経済学なのか、古典派でもアダム・スミスなのか、J.S.ミルなのか、ドイツ歴史学派なのか、といったことが、細かいことのように見えるが、経済学史研究の観点からは重要な要素であり、「経済学的世界観」で社会を見るときに切り捨てられるものがあることは確かだとしても、経済学と一括りにしてよいわけではなく、多様な「経済学的世界観」を判別しなければならないのである。

さらに金野氏は、東京女子大学における女子経済学教育の開始を取り上げ、キリスト教と経済学の関連について、「経済的利益を求める活動に対しては慎重姿勢を少なくとも表明してきたキリスト教的世界観のなかに、経済学という学問はすっきり包摂しにくいもののようにも感じる」と違和感を表明されている⁵。しかし、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1904-05）を持ち出すまでもなく、少なくともプロテスタントに経済活動さらには利潤追求を忌避する思想は見られないと言ってよいだろう。私的利益の追求を経済活動の根幹に置いたアダム・スミスが節約の意義を強調したように、どのように使われるのかが問題だったのであり、利益追求そのものが問題視されていたわけではない。セミナーで「社会の経済学化」を議論した際に、経済学理解そのものを確認する作業を行うことによって、さらに議論を深めることができたのではないかと反省している。

3 お茶の水女子大学ジェンダー研究所（2018）pp.13-17

4 お茶の水女子大学ジェンダー研究所（2018）p.43

5 お茶の水女子大学ジェンダー研究所（2018）p.42

2. 安井てつのネットワーク

2-1. 安井てつと大江スミ

文書コメントで参加された池尾愛子氏は、経済学史の観点からの指摘の後に、「大江スミにとって大切な人だった安井てつのこと、大変参考になりました」と書き加えられた。そのように評価していただいたけれど、実際には、安井てつに関して十分には論じきれなかったもので、ここで、安井の周辺の人間関係に目を向けながら、その思想をもう少し探ることにしたい。

安井てつと大江スミの関係について、本書では、東京女子大学設立に結実したキリスト教女子高等教育に関する調査委員会（1911年）に、津田梅子、三谷民とともに、安井と大江（宮川）スミが参加したことを紹介した⁷。しかし、二人の関係は、文部省の女子高等師範学校卒業生の官費留学制度による大江（宮川）のイギリス留学（1902年）に遡ることができる。この留学決定には、同じ制度でイギリス留学を果たした女高師の先輩、安井てつの推薦が効力を持ったと言われている⁸。教育学と家政学の研究を命じられながら、倫理学の研究に打ち込み、家政学の研究を放棄した安井にとって⁹、卒業後沖縄での教師生活の中で生活改善活動まで展開した大江（宮川）こそ、実践を含んだ家政学の確立に最適の人物だと思われたのである¹⁰。安井は家政学そのものを評価することはできなかったが、実験を含む実践的な教育方法の必要性を強く感じていた。そして、この実験の重視は、安井が東京女子大学に理科を導入しようとしたことと無縁ではなかった¹¹。

1907年に帰国し、女高師教授に就任した大江（宮川）が積極的に実験・実習を取り入れた家政学のカリキュラムを模索したことを見ると、彼女は安井の期待によく応えたと言えるだろう。もっとも、この設備費のかかる実験・実習へのこだわりが学内での孤立を招き、大江は女高師を離れ、理想の家政学教育を実施するために、1925年に東京家政学院を設立することになる。ここで目を引くのは、東京家政学院で経済学教育が展開されていたことである。創立当初の家政高等師範部のカリキュラムには、統計学や社会学と並んで、すでに経済学が含まれていた¹²。さらに、昭和2年のカリキュラムには、社会学や時事問題と並んで、週2回の経済学の授業が行われていた¹³。さらに、昭和11年には、女高師の松平友子が家事経済の講義を担当していた¹⁴。この東京家政学院における経済学教育の内容や意義の解明はこれからの課題であるが、経済学と家事経済学が併存して教授されていた事実を書きとどめておきたいと思う。

6 お茶の水女子大学ジェンダー研究所（2018）p.32

7 栗田・松野尾・生垣編（2016）p.52

8 大濱（1978）pp.78-80

9 安井は家事経済を論じる際にも、「先づ学問して天賦の能力を発達せしめ、心に十分の訓練を与えざるべからず」（安井（1901）p.42）と、人格教育を優先させている。

10 安井と大江（宮川）のあいだに厚い信頼関係が存在したことは、1915年に安井が紹介した大江玄寿と大江（宮川）が結婚したことからも伺える。玄寿が富士見町教会の重鎮であったことも、クリスチャンだった大江（宮川）にとっては、結婚を決意する重要な要因だった（大濱（1978）p.155）。

11 安井は論理性を養う学問として理系を重視していた。だが、実験室には多大な経費が必要なことを理由に理系を断念し、数学科の設置に方向転換したと言われている。青山（1949）pp.246-247。

12 大濱（1978）p.212

13 経済学担当はオックスフォード大学で学び、東大の教員になった山崎宗直である。主著の『商業英語と貿易実務』（1951年）から判断すると、経済理論の専門家とは言えないようである。

14 大濱（1978）pp.217-218

2-2. 『新女界』の役割

安井てつは、東京女子大学学監に就任するまで、女高師で教える傍ら、『新女界』の主筆を務めていた。『新女界』は、本郷教会牧師、海老名弾正（1856-1937）が創刊した『新人』の姉妹誌であり、1909年から1919年までの10年間発行されている。『新人』1908年10月号には、「安井哲子女史、宮川寿美子女史の如き、共に本郷教会員として此挙に助力せらるべく」と『新女界』の予告が掲載されている¹⁵。1919年の最終号には、学監としての多忙な日々『新女界』での執筆が減っていた安井ではあるが、広岡浅子（1849-1919）の追悼文を寄せている。このように、『新女界』は安井のネットワークを把握する手段でもある。もちろん、この雑誌が彼女の哲学あるいは社会思想を読み解くための貴重な情報源であることは言うまでもない。『新女界』に新渡戸稲造と安井てつがそろって語った東京女子大学開学の意義についてはすでに本書第2章で分析したが、ここでもう一度、安井の教育論を確認しておきたい。

『新女界』には、人格教育の必要性を説く安井の文章が数多く掲載されているが、その中でもとくに、「真に教養ある婦人」は、つぎの引用文に見られるように、人格教育の理解における安井と新渡戸の親近性を示している。

「『真に教養ある者』とは、単に多くの書物を読んだとか、又は専門的の学問を深く修めたと云ふのみの意義では御座りません。能く心身が訓練されて、其境遇に応じて適当に其身を処置し得るのみか、敏捷に其判断を実行し得る人を云ふのであります」¹⁷

新渡戸が変化する状況に対処する能力を教育の目標としたように¹⁸、安井もまた、女子高等教育の目的を柔軟に判断し行動できる女性の育成に見いだしたのである。しかしその一方、「生まれる子供即ち将来国家の要素たるべき者」¹⁹と捉え、自らが私淑した女高師の校長、中川謙二郎（1850-1928）の言葉を引きながら、「次代の国民を作るという大なる仕事」を果たすべき女性の育成も高等教育の役割と安井は捉えていた²⁰。このような姿勢を国家主義的とまで形容できるかは定かではないが、妻や母である前に人としての女性を育てる教育が、妻や母としての役割を軽視したわけではなく、国家という枠とも無縁ではなかったことは確かである。

2-3. 女性教育者のネットワーク

そのような時代の制約は、女性教育者のネットワーク形成にも顕著に見られる。安井てつと津田梅子、大江スミ、あるいは三谷民といったクリスチャンの女性教育者のネットワークについては、本書でも触れたが、第一次大戦後には、国家という枠のなかで、女性教育者のネットワークが意識的に形成されていった。そのひとつが生活改善同盟会である²¹。

生活改善同盟会は、文部省『生活改善の研究』（1922年）によれば、第一次大戦における勝利に浮かれ、「蕩々

15 同志社大学人文研究所編（1999）p.23。安井の1909年から11年のあいだの『新女界』の文章は、彼女の唯一の著作『久堅町にて』にまとめられている。

16 佐野安仁は、同志社大学人文研究所編（1999）において、『新女界』で表明された安井の思想をJ.S. マッケンジーの倫理学と比較しながら、理想主義の系譜に位置づけている。

17 安井（1909）pp.1-2

18 栗田・松野尾・生垣編（2016）p.37

19 安井（1917）p.10

20 中川（1925）p.3&p.5。安井はこの『婦人の力と帝国の将来』に中川を恩師として「序」を寄せている。

21 文部省主導の生活改善運動については、内田青蔵「生活改善運動の手引きとしての『生活改善の栞』を参照した（生活改善同盟会（1928）pp.437-443）。

として奢侈遊惰の弊風が生じた」という社会状況のなかで、「具体的な生活合理化論による国民生活の改善」を目的として、1920年（大正9年）に文部省の外郭団体として組織された²²。この同盟会は、「人が生き甲斐ある生活を営み、満足なる一生を遂げんとすれば、勢ひ過去の生活の様式を改善し、以て時勢の要求に応ずるものを選んで」ゆくことを目的として、各領域の調査委員会を設置した²³。それが、社交儀礼、服装、食事、住宅、暦の統一、ひな祭りの6調査委員会である。これらの委員会には食事に関する吉岡弥生や住宅に関する佐野利器のような専門家が委員長に配置されているが、女性教育者が非常に多く招聘されていることが目を引く。一見しただけでも、鳩山春子、塚本はま、山脇房子といった名前がずらっと並んでいることがわかる。安井てつは下田歌子、桜井ちか子、吉岡弥生などとともに社交儀礼の改善に関する調査委員会に名を連ねている。大江スミにいたっては、食事、住宅、ひな祭りの3つの調査委員会に参加していた²⁴。セミナーでは、経済学を学んだ女性たちが選んだ道に社会主義と社会事業という2つの方向性があったことを提示し、生活改善運動を第三の道として想定し、「社会」の発見から「生活」の発見に展開する可能性を示唆した。政府による「お仕着せ」であろうと、生活改善同盟会は女性たちに「生活」を発見させる機構だったのである²⁵。

3. おわりに一井上秀と日本女子大学の社会事業

お茶の水女子大学本館から始めた本稿の歩みを、日本女子大学桜楓会託児所で終えることにしたい。

日本女子大学の創始者成瀬仁蔵は、社会事業に携わる女性の育成を早い段階から構想していたと言われて²⁶いる。しかしその構想が実現したのは、創立から20年経った、成瀬の逝去後の1921年でしかなかった。この年に、児童保全科および女工保全科の二学科から構成される4年制の社会事業学部が新設された。この社会事業学部は1933年に廃止され、3年制の家政学部第三類に編成替えされた²⁷。これは、1918年の東京女子大学創立時に設置された実務科第一部・第二部が1921年の学則改正によって廃止され、社会事業に従事する女性の育成を目標とした実務科第二部を軸に大学部社会科に改組されたのと、ほぼ類似の経路を辿ったと言える。しかし、東京女子大学と比べて、日本女子大学の際だった特徴は、社会事業学部の設立に先立って、同窓会が託児事業を実践していたことである。

託児事業を組織したのは、1904年の卒業と同時に同窓会組織の桜楓会初代幹事長に就任した井上秀（1875-1963）だった。井上は、旧知の広岡浅子の薦めで1908年（明治41年）に渡米し、ニューヨークのコロンビア師範学校で家政学、シカゴ大学で社会学と経済学を学んだ。勉学を終え、ヨーロッパ経由で帰国する途上で訪問した各地の女子大学の隣保事業に感銘を受けた井上は、1910年に帰国後日本女子大学家政学教授に就任するとともに、桜楓会の託児事業を立ち上げた²⁸。1913年には当時「太陽のない街」と呼ばれ、

22 大濱（1978）p.223より引用。

23 生活改善同盟会（1928）p.231

24 生活改善同盟会（1928）pp.233-234

25 安井が学習院辞職後、津田英学塾で教鞭を執っていたときの教え子の一人である山川菊栄は、「……津田先生にしても、河井先生、安井先生にしても、いずれも清純な理想家で、天国に遊ぶ童女のごとく聖女のごとく、天真らんまんすぎて現実離れがしており、現代の学生が何を求め、何を考えているかには無関心でした」（山川（2014）p.173）と語っているが、安井らが社会との接点をまったく持たなかったわけではないことは、生活改善同盟会のような政策諮問に関わったことが示している。

26 井上秀先生記念出版委員会編（1973）p.35

27 井上秀先生記念出版委員会編（1973）p.126

28 女高師校長の中川謙二郎は、女性活躍の場として社会事業を位置づけ、「今日の時勢に於ては家庭に於けるのみならず、余力を持って社会的事業にも各自幾分の努力をなすことは、一般の女子にとって大切なことである」とした。彼はこの観点から、「我が国に於ても、最近女子大学桜楓会の事業として、児童預所の如き設備が試みられ」たことに注目している。中川（1925）pp.158-

細民地区として有名だった小石川区久堅町に桜楓会託児所を開設した²⁹。これによって、「手足まといの乳幼児があり、出るに出不られる労働者の妻の共稼ぎ」ができるようになった³⁰。託児所の人気は高く、代々木宮下町に移転した1915年には園児数は80名を超えていた。桜楓会はさらに、社会事業学部が開設された1921年には、働く女性を対象とした桜楓会アパートを完成させている³¹

こうしてみると、高等女子師範学校の家事経済学にせよ、日本女子大学の社会事業にせよ、家政学部を有する大学の特徴は、その経験主義あるいは実践主義にあったように見える。そこに、リベラル・アーツ教育を基本とする東京女子大学の経済学とのちがいがあったのではないだろうか。

参考文献

- 青山なを（1949）『安井てつ傳』東京女子大学同窓会
- 井上秀先生記念出版委員会編（1973）『井上秀先生』桜楓会
- 大濱徹也（1978）『大江スミ先生』（東京家政学院光塩会編）東京家政学院光塩会
- お茶の水女子大学ジェンダー研究所（2018）『IGS セミナー：日本における女性と経済学』（本報告書）
- 「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会（1964）『お茶の水女子大学百年史』『お茶の水女子大学百年史』刊行委員会
- 栗田啓子・松野尾裕・生垣琴絵（2016）『日本における女性と経済学— 1910年代の黎明期から現代まで』北海道大学出版会
- 五味百合子編著（1973）『社会事業に生きた女性たち—その生涯と仕事』ドメス出版
- 生活改善同盟会（1928）『生活改善の栞 改訂版』（森仁史監修『叢書近代日本のデザイン 20』ユマニ書房）
- 同志社大学人文研究所編（1999）『『新人』『新女界』の研究 20世紀初頭キリスト教ジャーナリズム』人文書院
- 中川謙二郎（1925）『婦人の力と帝国の将来』（中畠邦監修『近代日本女子教育文献集』（第Ⅱ期）第20巻、1984年、日本図書センター）
- 安井てつ（1901）「家事経済」女子教育研究会『女子教育』第1号、pp.41-43
- ……（1909）「真に教養ある婦人」『新女界』第1巻第9号、pp.1-4
- ……（1915）『久堅町にて』警醒社
- ……（1917）「家庭と社会」『新女界』第9巻第11号、pp.9-14
- ……（1919）「故廣岡女史の告別式に臨みて」第11巻第1号、pp.13-17
- 山川菊栄（2014）『おんな二代の記』岩波文庫版（初版は『女二代の記—私の半自叙伝』日本評論社、1956年）

159。

29 久堅町は、安井てつが大正4年頃に居住していた町である。安井（1915）「はしがき」。

30 井上秀先生記念出版委員会編（1973）p.742

31 井上秀先生記念出版委員会編（1973）p.743